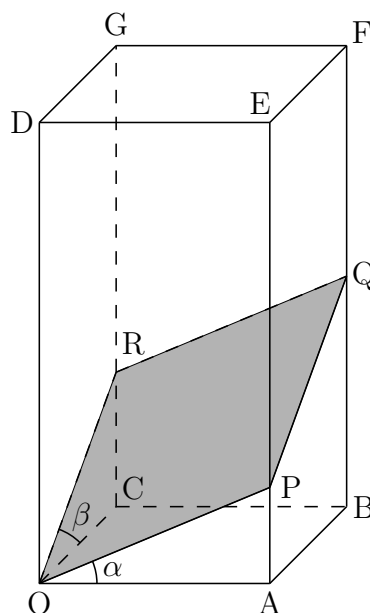


平成 26 年度 東京大学 2 次試験前期日程 (数学問題)150 分  
理科 (一類, 二類, 三類) 数 I · II · III · A · B · C

1 1 辺の長さが 1 の正方形を底面とする四角柱  $OABC-DEFG$  を考える. 3 点  $P$ ,  $Q$ ,  $R$  を, それぞれ辺  $AE$ , 辺  $BF$ , 辺  $CG$  上に, 4 点  $O$ ,  $P$ ,  $Q$ ,  $R$  が同一平面上にあるようにとる. 四角形  $OPQR$  の面積を  $S$  とおく. また,  $\angle AOP$  を  $\alpha$ ,  $\angle COR$  を  $\beta$  とおく.

(1)  $S$  を  $\tan \alpha$  と  $\tan \beta$  を用いて表せ.

(2)  $\alpha + \beta = \frac{\pi}{4}$ ,  $S = \frac{7}{6}$  であるとき,  $\tan \alpha + \tan \beta$  の値を求めよ. さらに,  $\alpha \leq \beta$  のとき,  $\tan \alpha$  の値を求めよ.



2  $a$  を自然数 (すなわち 1 以上の整数) の定数とする.

白球と赤球があわせて 1 個以上入っている袋  $U$  に対して, 次の操作  $(*)$  を考える.

$(*)$  袋  $U$  から球を 1 個取り出し,

(i) 取り出した球が白球のときは, 袋  $U$  の中身が白球  $a$  個, 赤球 1 個となるようにする.

(ii) 取り出した球が赤球のときは, その球を袋  $U$  へ戻すことなく, 袋  $U$  の中身はそのままにする.

はじめに袋  $U$  の中に, 白球が  $a + 2$  個, 赤球が 1 個入っているとす. この袋  $U$  に対して操作  $(*)$  を繰り返し行う.

たとえば, 1 回目の操作で白球が出たとすると, 袋  $U$  の中身は白球  $a$  個, 赤球 1 個となり, さらに 2 回目の操作で赤球が出たとすると, 袋  $U$  の中身は白球  $a$  個のみとなる.

$n$  回目に取り出した球が赤球である確率を  $p_n$  とす. ただし, 袋  $U$  の中の個々の球の取り出される確率は等しいものとする.

(1)  $p_1, p_2$  を求めよ.

(2)  $n \geq 3$  に対して  $p_n$  を求めよ.

(3)  $\lim_{m \rightarrow \infty} \frac{1}{m} \sum_{n=1}^m p_n$  を求めよ.

3  $u$  を実数とする. 座標平面上の2つの放物線

$$C_1: y = -x^2 + 1$$

$$C_2: y = (x - u)^2 + u$$

を考える.  $C_1$  と  $C_2$  が共有点をもつような  $u$  の値の範囲は, ある実数  $a, b$  により,  $a \leq u \leq b$  と表される.

(1)  $a, b$  の値を求めよ.

(2)  $u$  が  $a \leq u \leq b$  をみたすとき,  $C_1$  と  $C_2$  の共有点を  $P_1(x_1, y_1), P_2(x_2, y_2)$  とする. ただし, 共有点が1点のみのときは,  $P_1$  と  $P_2$  は一致し, ともにその共有点を表すとする.

$$2|x_1y_2 - x_2y_1|$$

を  $u$  の式で表せ.

(3) (2) で得られる  $u$  の式を  $f(u)$  とする. 定積分

$$I = \int_a^b f(u) du$$

を求めよ.

4  $p, q$  は実数の定数で,  $0 < p < 1, q > 0$  をみたすとする. 関数

$$f(x) = (1 - p)x + (1 - x)(1 - e^{-qx})$$

を考える.

以下の問いに答えよ. 必要であれば, 不等式  $1 + x \leq e^x$  がすべての実数  $x$  に対して成り立つことを証明なしに用いてよい.

(1)  $0 < x < 1$  のとき,  $0 < f(x) < 1$  であることを示せ.

(2)  $x_0$  は  $0 < x_0 < 1$  をみたす実数とする. 数列  $\{x_n\}$  の各項  $x_n$  ( $n = 1, 2, 3, \dots$ ) を,

$$x_n = f(x_{n-1})$$

によって順次定める.  $p > q$  であるとき,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = 0$$

となることを示せ.

(3)  $p < q$  であるとき,

$$c = f(c), \quad 0 < c < 1$$

をみたす実数  $c$  が存在することを示せ.

**5**  $r$  を 0 以上の整数とし、数列  $\{a_n\}$  を次のように定める。

$$a_1 = r, \quad a_2 = r + 1, \quad a_{n+2} = a_{n+1}(a_n + 1) \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

また、素数  $p$  を 1 つとり、 $a_n$  を  $p$  で割った余りを  $b_n$  とする。ただし、0 を  $p$  で割った余りは 0 とする。

- (1) 自然数  $n$  に対し、 $b_{n+2}$  は  $b_{n+1}(b_n + 1)$  を  $p$  で割った余りと一致することを示せ。
- (2)  $r = 2$ ,  $p = 17$  の場合に、10 以下のすべての自然数  $n$  に対して、 $b_n$  を求めよ。
- (3) ある 2 つの相異なる自然数  $n, m$  に対して、

$$b_{n+1} = b_{m+1} > 0, \quad b_{n+2} = b_{m+2}$$

が成り立ったとする。このとき、 $b_n = b_m$  が成り立つことを示せ。

- (4)  $a_2, a_3, a_4, \dots$  に  $p$  で割り切れる数が現れないとする。このとき、 $a_1$  も  $p$  で割り切れないことを示せ。

**6** 座標平面の原点を  $O$  で表す。

線分  $y = \sqrt{3}x$  ( $0 \leq x \leq 2$ ) 上の点  $P$  と、線分  $y = -\sqrt{3}x$  ( $-2 \leq x \leq 0$ ) 上の点  $Q$  が、線分  $OP$  と線分  $OQ$  の長さの和が 6 となるように動く。このとき、線分  $PQ$  の通過する領域を  $D$  とする。

- (1)  $s$  を  $0 \leq s \leq 2$  をみたす実数とするとき、点  $(s, t)$  が  $D$  に入るような  $t$  の範囲を求めよ。
- (2)  $D$  を図示せよ。

## 解答例

- 1** (1) 座標空間において、 $O$  を原点とし、 $A(1, 0, 0)$ ,  $B(1, 1, 0)$ ,  $C(0, 1, 0)$ ,  $P(1, 0, \tan \alpha)$ ,  $R(0, 1, \tan \beta)$  とおくと

$$\overrightarrow{OP} + \overrightarrow{OR} = (1, 1, \tan \alpha + \tan \beta)$$

であるから、このベクトルの  $x$  成分と  $y$  成分に注意すると

$$Q(1, 1, \tan \alpha + \tan \beta)$$

四角形  $OPQR$  は、平行四辺形であるから

$$\begin{aligned} S &= \sqrt{|\overrightarrow{OP}|^2 |\overrightarrow{OR}|^2 - (\overrightarrow{OP} \cdot \overrightarrow{OR})^2} \\ &= \sqrt{(1 + \tan^2 \alpha)(1 + \tan^2 \beta) - (\tan \alpha \tan \beta)^2} \\ &= \sqrt{1 + \tan^2 \alpha + \tan^2 \beta} \end{aligned}$$

別解  $\overrightarrow{OP} = (1, 0, \tan \alpha)$  と  $\overrightarrow{OQ} = (0, 1, \tan \beta)$  の外積 (ベクトル積) を  $\vec{v}$  とすると (p.7 を参照)

$$\vec{v} = \overrightarrow{OP} \times \overrightarrow{OQ} = (-\tan \alpha, -\tan \beta, 1)$$

平面  $OABC$  の法線ベクトルを  $\vec{n} = (0, 0, 1)$  とする.

$\vec{v}$  と  $\vec{n}$  のなす角を  $\theta$  とすると

$$\cos \theta = \frac{\vec{v} \cdot \vec{n}}{|\vec{v}| |\vec{n}|} = \frac{1}{\sqrt{\tan^2 \alpha + \tan^2 \beta + 1}}$$

正方形  $OABC$  の面積が 1 であるから、求める面積を  $S$  とすると

$$S \cos \theta = 1 \quad \text{よって} \quad S = \frac{1}{\cos \theta} = \sqrt{\tan^2 \alpha + \tan^2 \beta + 1}$$

(2)  $\alpha + \beta = \frac{\pi}{4}$  より,  $\tan(\alpha + \beta) = 1$  であるから

$$\frac{\tan \alpha + \tan \beta}{1 - \tan \alpha \tan \beta} = 1 \quad \text{ゆえに} \quad \tan \alpha \tan \beta = 1 - \tan \alpha - \tan \beta \quad \cdots \textcircled{1}$$

$S = \frac{7}{6}$  より, (1) の結果から

$$\sqrt{1 + \tan^2 \alpha + \tan^2 \beta} = \frac{7}{6} \quad \text{ゆえに} \quad \tan^2 \alpha + \tan^2 \beta = \frac{13}{36} \quad \cdots \textcircled{2}$$

①, ② を  $\tan^2 \alpha + \tan^2 \beta = (\tan \alpha + \tan \beta)^2 - 2 \tan \alpha \tan \beta$  に代入すると

$$\frac{13}{36} = (\tan \alpha + \tan \beta)^2 - 2(1 - \tan \alpha - \tan \beta)$$

$$\text{したがって} \quad (\tan \alpha + \tan \beta + 1)^2 = \frac{121}{36}$$

$$\tan \alpha + \tan \beta > 0 \text{ であるから} \quad \tan \alpha + \tan \beta = \frac{5}{6}$$

$$\text{これを ① に代入して} \quad \tan \alpha \tan \beta = \frac{1}{6}$$

上の 2 式から,  $\tan \alpha, \tan \beta$  を解とする 2 次方程式は

$$x^2 - \frac{5}{6}x + \frac{1}{6} = 0 \quad \text{これを解いて} \quad x = \frac{1}{3}, \frac{1}{2}$$

$$0 < \alpha \leq \beta \leq \frac{\pi}{4} \text{ であるから} \quad \tan \alpha \leq \tan \beta \text{ より} \quad \tan \alpha = \frac{1}{3}$$

別解 ① より,  $1 - \tan \alpha \tan \beta = \tan \alpha + \tan \beta$  の両辺を平方すると

$$(1 - \tan \alpha \tan \beta)^2 = (\tan \alpha + \tan \beta)^2$$

整理すると  $\tan^2 \alpha \tan^2 \beta - 4 \tan \alpha \tan \beta + 1 = \tan^2 \alpha + \tan^2 \beta$

上式に ② を代入して, 整理すると

$$\begin{aligned} \tan^2 \alpha \tan^2 \beta - 4 \tan \alpha \tan \beta + \frac{23}{36} &= 0 \\ \left( \tan \alpha \tan \beta - \frac{1}{6} \right) \left( \tan \alpha \tan \beta - \frac{23}{6} \right) &= 0 \end{aligned}$$

$\alpha + \beta = \frac{\pi}{4}$  より,  $0 < \alpha < \frac{\pi}{4}$ ,  $0 < \beta < \frac{\pi}{4}$  であるから  $0 < \tan \alpha \tan \beta < 1$

したがって  $\tan \alpha \tan \beta = \frac{1}{6}$  ① より  $\tan \alpha + \tan \beta = \frac{5}{6}$  以下同様

## 外積 (ベクトル積)

2つのベクトル  $\vec{a} = (a_1, a_2, a_3)$ ,  $\vec{b} = (b_1, b_2, b_3)$  が平行でないとき, ベクトル

$$(a_2b_3 - a_3b_2, a_3b_1 - a_1b_3, a_1b_2 - a_2b_1)$$

は,  $\vec{a}$  および  $\vec{b}$  に直交する. このベクトルを,  $\vec{a}$  と  $\vec{b}$  の外積 (ベクトル積) と言い,  $\vec{a} \times \vec{b}$  で表し (内積をスカラー積とも言う), その成分は

$$\vec{a} \times \vec{b} = (a_2b_3 - a_3b_2, a_3b_1 - a_1b_3, a_1b_2 - a_2b_1)$$

であるから,  $\vec{b} \times \vec{a} = -\vec{a} \times \vec{b}$  が成り立つ. また, その大きさについて

$$\begin{aligned} |\vec{a} \times \vec{b}|^2 &= (a_2b_3 - a_3b_2)^2 + (a_3b_1 - a_1b_3)^2 + (a_1b_2 - a_2b_1)^2 \\ &= (a_1^2 + a_2^2 + a_3^2)(b_1^2 + b_2^2 + b_3^2) - (a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3)^2 \\ &= |\vec{a}|^2|\vec{b}|^2 - (\vec{a} \cdot \vec{b})^2 \end{aligned}$$

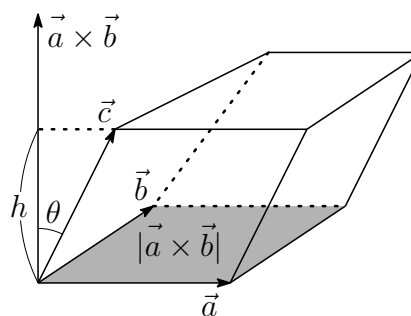
であるから,  $\vec{a} \times \vec{b}$  の大きさは,  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$  の張る平行四辺形の面積に等しい.

$\vec{a} \times \vec{b}$  と  $\vec{c}$  のなす角を  $\theta$  ( $0 \leq \theta \leq \pi$ ) とすると

$$(\vec{a} \times \vec{b}) \cdot \vec{c} = |\vec{a} \times \vec{b}| |\vec{c}| \cos \theta$$

絶対値をとると

$$|(\vec{a} \times \vec{b}) \cdot \vec{c}| = |\vec{a} \times \vec{b}| |\vec{c}| |\cos \theta|$$



$\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  の張る平行六面体について,  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$  の張る平面を底面とすると,  $|\vec{c}| \cos \theta$  は, その高さ  $h$  であるから, この平行六面体の体積  $V_1$  は

$$V_1 = |(\vec{a} \times \vec{b}) \cdot \vec{c}|$$

$\vec{OA} = \vec{a}$ ,  $\vec{OB} = \vec{b}$ ,  $\vec{OC} = \vec{c}$  とすると, 四面体 OABC の体積  $V$  は

$$V = \frac{1}{6} |(\vec{a} \times \vec{b}) \cdot \vec{c}|$$

また, 対称性により, 次式が成立する.

$$|(\vec{a} \times \vec{b}) \cdot \vec{c}| = |(\vec{b} \times \vec{c}) \cdot \vec{a}| = |(\vec{c} \times \vec{a}) \cdot \vec{b}|$$



- 2 (1) 1回目の袋Uの中には白球が $a+2$ 個, 赤球が1個入っているから

$$p_1 = \frac{1}{(a+2)+1} = \frac{1}{a+3}$$

1回目に赤球が出ると, 2回目に球を取り出すとき, 袋Uの中には赤球はない. 1回目に白球が出て, 2回目(袋Uの中に白球 $a$ 個, 赤球が1個)に赤球が出る確率であるから

$$p_2 = (1-p_1) \times \frac{1}{a+1} = \left(1 - \frac{1}{a+3}\right) \frac{1}{a+1} = \frac{a+2}{(a+1)(a+3)}$$

- (2) (i)  $n$ 回目 ( $n \geq 1$ ) の試行で赤球が出たとき (確率  $p_n$ ),  $n+1$ 回目の試行 (袋Uの中に赤球は0個) で赤球が出る確率は 0  
(ii)  $n$ 回目 ( $n \geq 1$ ) の試行で白球が出たとき (確率  $1-p_n$ ),  $n+1$ 回目の試行 (袋Uの中に白球 $a$ 個, 赤球1個) で赤球が出る確率は

$$(1-p_n) \times \frac{1}{a+1}$$

(i), (ii) より 
$$p_{n+1} = 0 + (1-p_n) \times \frac{1}{a+1} = \frac{1}{a+1}(1-p_n)$$

したがって 
$$p_{n+1} - \frac{1}{a+2} = -\frac{1}{a+1} \left( p_n - \frac{1}{a+2} \right)$$

よって,  $n \geq 1$  のとき

$$p_n - \frac{1}{a+2} = \left( p_1 - \frac{1}{a+2} \right) \left( -\frac{1}{a+1} \right)^{n-1}$$

$$p_n = \frac{1}{a+2} - \frac{1}{(a+2)(a+3)} \left( -\frac{1}{a+1} \right)^{n-1}$$

- (3) (2) の結果から,  $r = -\frac{1}{a+1}$  とおくと

$$\begin{aligned} \frac{1}{m} \sum_{n=1}^m p_n &= \frac{1}{a+2} - \frac{1}{m(a+2)(a+3)} \sum_{n=1}^m r^{n-1} \\ &= \frac{1}{a+2} - \frac{1}{m} \cdot \frac{1}{(a+2)(a+3)} \cdot \frac{1-r^{m-1}}{1-r} \end{aligned}$$

$|r| < 1$  であるから,  $\lim_{m \rightarrow \infty} \frac{1}{m} = 0$ ,  $\lim_{m \rightarrow \infty} r^{m-1} = 0$  より

$$\lim_{m \rightarrow \infty} \frac{1}{m} \sum_{n=1}^m p_n = \frac{1}{a+2}$$





**3** (1)  $C_1: y = -x^2 + 1, C_2: y = (x - u)^2 + u$

$C_1$  と  $C_2$  から  $y$  を消去すると,  $x$  に関する 2 次方程式

$$-x^2 + 1 = (x - u)^2 + u \quad \text{すなわち} \quad 2x^2 - 2ux + u^2 + u - 1 = 0 \quad \dots (*)$$

を得る. (\*) が実数解をもつから, 係数について

$$D/4 = (-u)^2 - 2(u^2 + u - 1) = -u^2 - 2u + 2 \geq 0$$

ゆえに  $u^2 + 2u - 2 \leq 0$  これを解いて  $-1 - \sqrt{3} \leq u \leq -1 + \sqrt{3}$

よって  $\mathbf{a = -1 - \sqrt{3}, b = -1 + \sqrt{3}}$

(2)  $x_1, x_2$  は 2 次方程式 (\*) の解であるから, 解と係数の関係により

$$x_1 + x_2 = u, \quad x_1 x_2 = \frac{u^2 + u - 1}{2}$$

$$\begin{aligned} \text{よって} \quad 2|x_1 y_2 - x_2 y_1| &= 2|x_1(-x_2^2 + 1) - x_2(-x_1^2 + 1)| \\ &= 2|x_1 x_2 + 1||x_1 - x_2| \\ &= 2 \left| \frac{u^2 + u - 1}{2} + 1 \right| \sqrt{(x_1 + x_2)^2 - 4x_1 x_2} \\ &= (u^2 + u + 1) \sqrt{u^2 - 2(u^2 + u - 1)} \\ &= \mathbf{(u^2 + u + 1) \sqrt{-u^2 - 2u + 2}} \end{aligned}$$

(3) (2) の結果から  $f(u) = (u^2 + u + 1) \sqrt{-u^2 - 2u + 2}$

$$I = \int_a^b f(u) du = \int_a^b \{(u + 1)^2 - (u + 1) + 1\} \sqrt{3 - (u + 1)^2} du$$

$u + 1 = \sqrt{3} \sin \theta$  とおくと  $\frac{du}{d\theta} = \sqrt{3} \cos \theta$

$u$	$a$	$\rightarrow$	$b$
$\theta$	$-\frac{\pi}{2}$	$\rightarrow$	$\frac{\pi}{2}$

$$\begin{aligned} I &= \int_{-\frac{\pi}{2}}^{\frac{\pi}{2}} \{3 \sin^2 \theta + \sqrt{3} \sin \theta + 1\} \cdot 3 \cos^2 \theta d\theta \\ &= 6 \int_0^{\frac{\pi}{2}} (3 \sin^2 \theta \cos^2 \theta + \cos^2 \theta) d\theta \\ &= 6 \int_0^{\frac{\pi}{2}} \left\{ \frac{3}{8} (1 - \cos 4\theta) + \frac{1}{2} (1 + \cos 2\theta) \right\} d\theta \\ &= 6 \left[ \frac{3}{8} \left( \theta - \frac{1}{4} \sin 4\theta \right) + \frac{1}{2} \left( \theta + \frac{1}{2} \sin 2\theta \right) \right]_0^{\frac{\pi}{2}} = \mathbf{\frac{21}{8} \pi} \end{aligned}$$

## ウォリス (Wallis) の積分

$m$  を 0 以上の整数とする. 定積分

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^m \theta \, d\theta$$

を  $\theta = \frac{\pi}{2} - u$  とおくと  $\frac{d\theta}{du} = -1$

$\theta$	$0 \longrightarrow \frac{\pi}{2}$
$u$	$\frac{\pi}{2} \longrightarrow 0$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^m \theta \, d\theta = \int_{\frac{\pi}{2}}^0 \sin^m \left( \frac{\pi}{2} - u \right) (-du) = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^m u \, du$$

ウォリス積分は次式で定義される ( $m$  は 0 以上の整数).

$$I_m = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^m \theta \, d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^m \theta \, d\theta$$

部分積分法により

$$\begin{aligned} I_{m+2} &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^{m+2} \theta \, d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{2}} (\sin \theta)' \cos^{m+1} \theta \, d\theta \\ &= \left[ \sin \theta \cos^{m+1} \theta \right]_0^{\frac{\pi}{2}} + (m+1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^2 \theta \cos^m \theta \, d\theta \\ &= (m+1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} (1 - \cos^2 \theta) \cos^m \theta \, d\theta \\ &= (m+1)(I_m - I_{m+2}) \end{aligned}$$

したがって, 漸化式  $I_{m+2} = \frac{m+1}{m+2} I_m$  を得る. これから

$$I_0 = \frac{\pi}{2}, \quad I_2 = \frac{1}{2} I_0 = \frac{\pi}{4}, \quad I_4 = \frac{3}{4} I_2 = \frac{3}{4} \cdot \frac{1}{2} I_0 = \frac{3}{16} \pi$$

本題の途中計算から

$$\begin{aligned} \frac{I}{6} &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} (3 \sin^2 \theta \cos^2 \theta + \cos^2 \theta) \, d\theta \\ &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} (4 \cos^2 \theta - 3 \cos^4 \theta) \, d\theta \\ &= 4I_2 - 3I_4 = 4 \cdot \frac{\pi}{4} - 3 \cdot \frac{3}{16} \pi = \frac{7}{16} \pi \end{aligned}$$

よって  $I = \frac{21}{8} \pi$

$n$  を自然数とすると

$$\prod_{k=1}^n \frac{I_{2k}}{I_{2k-2}} = \prod_{k=1}^n \frac{2k-1}{2k} = \prod_{k=1}^n \frac{2k(2k-1)}{(2k)^2}$$

$$\frac{I_{2n}}{I_0} = \prod_{k=1}^n \frac{2k(2k-1)}{2^2 k^2} = \frac{(2n)!}{2^{2n}(n!)^2} = \frac{{}_{2n}C_n}{2^{2n}}$$

上式は,  $n=0$  のときも成立する.  $I_0 = \int_0^{\frac{\pi}{2}} d\theta = \frac{\pi}{2}$  より

$$I_{2n} = \frac{{}_{2n}C_n}{2^{2n+1}} \pi \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

$n$  を自然数とすると

$$\prod_{k=1}^n \frac{I_{2k+1}}{I_{2k-1}} = \prod_{k=1}^n \frac{2k}{2k+1} = \prod_{k=1}^n \frac{(2k)^2}{(2k+1) \cdot 2k}$$

$$\frac{I_{2n+1}}{I_1} = \prod_{k=1}^n \frac{2^2 k^2}{(2k+1) \cdot 2k}$$

$$= \frac{2^{2n}(n!)^2}{(2n+1)!} = \frac{2^{2n}}{(2n+1) \cdot {}_{2n}C_n}$$

上式は,  $n=0$  のときも成立する.  $I_1 = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin \theta d\theta = 1$  より

$$I_{2n+1} = \frac{2^{2n}}{(2n+1) \cdot {}_{2n}C_n} \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

## 発展

積分公式

$$\int_{\alpha}^{\beta} (x - \alpha)^m (\beta - x)^n dx = \frac{m!n!}{(m+n+1)!} (\beta - \alpha)^{m+n+1}$$

が成り立つ<sup>1</sup>. これに  $m = n = \frac{1}{2}$ ,  $\alpha = -1$ ,  $\beta = 1$  を代入すると

$$\int_{-1}^1 \sqrt{1-x^2} dx = \frac{\left(\frac{1}{2}!\right)^2}{2!} \cdot 2^2$$

左辺は、中心を原点とする半径1の円の  $x$  軸の上側にある半円の面積であるから

$$\frac{\pi}{2} = 2 \left(\frac{1}{2}!\right)^2 \quad \text{ゆえに} \quad \frac{1}{2}! = \frac{\sqrt{\pi}}{2}$$

さらに、 $\frac{3}{2}! = \frac{3}{2} \cdot \frac{1}{2}! = \frac{3}{4} \sqrt{\pi}$ ,  $\frac{5}{2}! = \frac{5}{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot \frac{1}{2}! = \frac{15}{8} \sqrt{\pi}$ ,  $\dots$  となる.

$$\begin{aligned} I &= \int_a^b f(u) du = \int_a^b \{-(-u^2 - 2u + 2) - (u + 1) + 4\} \sqrt{-u^2 - 2u + 2} du \\ &= - \int_a^b (u - a)^{\frac{3}{2}} (b - u)^{\frac{3}{2}} du + \frac{1}{3} \left[ (-u^2 - 2u + 2)^{\frac{3}{2}} \right]_a^b \\ &\quad + 4 \int_a^b (u - a)^{\frac{1}{2}} (b - u)^{\frac{1}{2}} du \\ &= - \frac{\left(\frac{3}{2}!\right)^2}{4!} (2\sqrt{3})^4 + 0 + 4 \cdot \frac{\left(\frac{1}{2}!\right)^2}{2!} (2\sqrt{3})^2 \\ &= -6 \left(\frac{3}{4} \sqrt{\pi}\right)^2 + 24 \left(\frac{\sqrt{\pi}}{2}\right)^2 = \frac{21}{8} \pi \end{aligned}$$

■

<sup>1</sup>[http://kumamoto.s12.xrea.com/nyusi/Qdai\\_tech.2010\\_kouki.pdf](http://kumamoto.s12.xrea.com/nyusi/Qdai_tech.2010_kouki.pdf) の 1 を参照.

4 (1)  $0 < p < 1$ ,  $q > 0$  より,  $0 < x < 1$  のとき

$$0 < (1-p)x, \quad 0 < 1-x < 1, \quad 0 < 1-e^{-qx} < 1$$

ゆえに  $0 < (1-p)x < (1-p)x + (1-x)(1-e^{-qx})$ ,

また  $(1-p)x + (1-x)(1-e^{-qx}) < (1-p)x + (1-x) \cdot 1$   
 $= 1 - px < 1$

よって  $0 < x < 1$  のとき  $0 < f(x) < 1$

(2) (1) の結果から,  $0 < x_{k-1} < 1$  のとき

$$0 < f(x_{k-1}) < 1 \quad \text{すなわち} \quad 0 < x_k < 1$$

$$0 < x_0 < 1 \text{ であるから } 0 < x_n < 1 \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

また,  $1 + (-qx_n) \leq e^{-qx_n}$  であるから,  $1 - e^{-qx_n} \leq qx_n$  より

$$\begin{aligned} x_{n+1} &= f(x_n) = (1-p)x_n + (1-x_n)(1-e^{-qx_n}) \\ &< (1-p)x_n + 1 \cdot qx_n = (1-p+q)x_n \end{aligned}$$

したがって  $0 < x_n < (1-p+q)^n x_0$

$0 < q < p < 1$  より,  $0 < 1-p < 1-p+q < 1$  であるから

$$\lim_{n \rightarrow \infty} (1-p+q)^n = 0$$

はさみうちの原理により  $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = 0$

補足 平均値の定理により

$$\frac{f(x_n) - f(0)}{x_n - 0} = f'(c_n), \quad 0 < c_n < x_n$$

をみたす  $c_n$  が存在する.

$f''(x) < 0$  ( $0 < x < 1$ ) より (次頁参照),  $f'(x)$  は単調減少.

また,  $x_{n+1} = f(x_n)$ ,  $f(0) = 0$  であるから

$$\frac{x_{n+1}}{x_n} = f'(c_n) < f'(0) = 1 - p + q$$

したがって  $x_{n+1} < (1-p+q)x_n$

(3)  $f(x) = (1-p)x + (1-x)(1-e^{-qx})$  より

$$\begin{aligned} f'(x) &= 1-p - (1-e^{-qx}) + q(1-x)e^{-qx} \\ &= -p + e^{-qx} + q(1-x)e^{-qx}, \\ f''(x) &= -qe^{-qx} - qe^{-qx} - q^2(1-x)e^{-qx} \\ &= -q\{2 + q(1-x)\}e^{-qx} < 0 \quad (0 < x < 1) \end{aligned}$$

ゆえに  $f'(0) = 1-p+q > 1$ ,  $f'(1) = -p + e^{-q} < 1$

$f'(x)$  は,  $0 < x < 1$  で単調減少であるから

$$f'(\alpha) = 1, \quad (0 < \alpha < 1)$$

をみたす  $\alpha$  が唯一存在する.

$$g(x) = \int_0^\alpha \{f'(t) - 1\} dt + \int_\alpha^x \{f'(t) - 1\} dt$$

とおくと  $g(\alpha) > 0$ ,  $g(1) = f(1) - f(0) - 1 = (1-p) - 0 - 1 = -p < 0$

中間値の定理により,  $g(c) = 0$  をみたす  $\alpha < c < 1$  が存在するから

$$\begin{aligned} g(c) &= \int_0^c \{f'(t) - 1\} dt = \left[ f(t) - t \right]_0^c \\ &= f(c) - f(0) - c = f(c) - c = 0 \end{aligned}$$

よって,  $c = f(c)$ ,  $0 < c < 1$  をみたす実数  $c$  が存在する.

補足  $g'(x) = f'(x) - 1$  であるから,  $\alpha < x < 1$  において

$$g'(x) < 0$$

したがって,  $\alpha < x < 1$  において,  $g'(x)$  は単調減少.

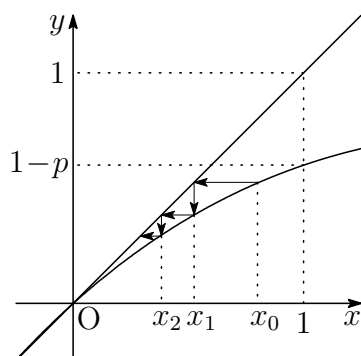
よって,  $g(c) = 0$ , すなわち

$$f(c) = c, \quad \alpha < c < 1$$

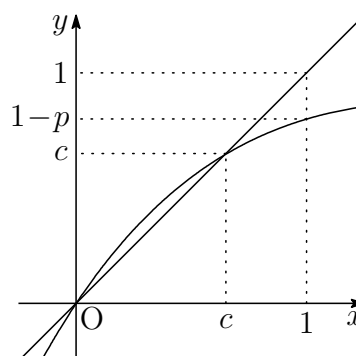
をみたす  $c$  はただ一つ存在する.

解説  $f'(x)$  は  $0 < x < 1$  で単調減少,  $f'(0) = 1 - p + q > 0$ ,  $f'(1) = -p + e^{-q} < 1$  であるから,  $y = f(x)$  と  $y = x$  のグラフは, (2)  $p > q$ , (3)  $p < q$  のとき, 次のようになる.

$p > q$  のとき



$p < q$  のとき



$p < q$  のとき,  $C(c, c)$ ,  $P_n(x_n, f(x_n))$  とし, 直線  $CP_n$  の傾きから

$$0 < \frac{f(x_n) - c}{x_n - c} < 1 \quad \text{ゆえに} \quad 0 < \frac{x_{n+1} - c}{x_n - c} < 1$$

$$\text{ゆえに} \quad 0 < x_0 < c \text{ のとき} \quad 0 < x_n < x_{n+1} < c \quad \cdots \textcircled{1}$$

$$c < x_0 < 1 \text{ のとき} \quad c < x_{n+1} < x_n < 1 \quad \cdots \textcircled{2}$$

① から, 上に有界な単調増加列  $\{x_n\}$  は収束し, ② から, 下に有界な単調減少列  $\{x_n\}$  は収束する.  $\frac{x_{n+1} - c}{x_n - c}$  の上限を  $m$  とすると<sup>2</sup>

$$0 < \prod_{k=0}^{n-1} \frac{x_{k+1} - c}{x_k - c} < m^n \quad \text{すなわち} \quad 0 < \frac{x_n - c}{x_0 - c} < m^n$$

$0 < m < 1$  であるから  $\lim_{n \rightarrow \infty} m^n = 0$  よって  $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = c$  ■

**5** (1)  $a_n$  を素数  $p$  で割った余りが  $b_n$  であるから

$$a_{n+2} \equiv b_{n+2}, \quad a_{n+1} \equiv b_{n+1}, \quad a_n \equiv b_n \pmod{p}$$

また,  $a_{n+2} = a_{n+1}(a_n + 1)$  であるから  $b_{n+2} \equiv b_{n+1}(b_n + 1) \pmod{p}$

よって,  $b_{n+2}$  は  $b_{n+1}(b_n + 1)$  を  $p$  で割った余りと一致する.

<sup>2</sup> 上限  $m$  は,  $0 < x_0 < c$  のとき  $m = \frac{x_1 - c}{x_0 - c}$ ,  $c < x_0 < 1$  のとき  $m = f'(c)$

(2)  $r = 2$  のとき,  $a_1 = 2$ ,  $a_2 = 3$  であるから, (1) の結果を用いると

$$b_1 \equiv 2, \quad b_2 \equiv 3, \quad b_{n+2} = b_{n+1}(b_n + 1) \pmod{17}$$

したがって, 法 17 について

$$b_3 \equiv b_2(b_1 + 1) \equiv 3(2 + 1) \equiv 9$$

$$b_4 \equiv b_3(b_2 + 1) \equiv 9(3 + 1) \equiv 36 \equiv 2$$

$$b_5 \equiv b_4(b_3 + 1) \equiv 2(9 + 1) \equiv 20 \equiv 3$$

$$b_6 \equiv b_5(b_4 + 1) \equiv 3(2 + 1) \equiv 9$$

$$b_7 \equiv b_6(b_5 + 1) \equiv 9(3 + 1) \equiv 36 \equiv 2$$

$$b_8 \equiv b_7(b_6 + 1) \equiv 2(9 + 1) \equiv 20 \equiv 3$$

$$b_9 \equiv b_8(b_7 + 1) \equiv 3(2 + 1) \equiv 9$$

$$b_{10} \equiv b_9(b_8 + 1) \equiv 9(3 + 1) \equiv 36 \equiv 2$$

よって  $b_1 = 2, b_2 = 3, b_3 = 9, b_4 = 2, b_5 = 3,$   
 $b_6 = 9, b_7 = 2, b_8 = 3, b_9 = 9, b_{10} = 2$

(3) (1) の結果を用いると

$$b_{n+2} \equiv b_{n+1}(b_n + 1), \quad b_{m+2} \equiv b_{m+1}(b_m + 1) \pmod{p}$$

$$b_{n+2} = b_{m+2} \text{ より } b_{n+1}(b_n + 1) \equiv b_{m+1}(b_m + 1) \pmod{p}$$

$$q = b_{n+1} = b_{m+1} \text{ とおくと } (q > 0)$$

$$q(b_n + 1) \equiv q(b_m + 1) \quad \text{ゆえに} \quad q(b_n - b_m) \equiv 0 \pmod{p}$$

$$q \not\equiv 0 \pmod{p} \text{ であるから } b_n - b_m \equiv 0 \quad \text{すなわち} \quad b_n \equiv b_m \pmod{p}$$

よって,  $b_n = b_m$  が成り立つ.

(4) 1 から  $p - 1$  までの  $p - 1$  個の数から重複を許して 2 個並べる順列の総数は  $(p - 1)^2$  であるから,  $n, m$  を  $(p - 1)^2 + 1$  以下の自然数とするとき

$$b_n = b_m, \quad b_{n+1} = b_{m+1} \quad (n \neq m)$$

をみたす自然数  $n, m$  が存在する. (3) の結果から,  $|m - n|$  個の数が巡回する. このとき, 巡回する数に 0 を含まないから  $b_1 \neq 0$

$$\text{したがって} \quad a_1 \equiv b_1 \neq 0 \pmod{p}$$

よって,  $a_1$  は  $p$  で割り切れない. ■



6 (1)  $P(p, \sqrt{3}p)$ ,  $Q(q, -\sqrt{3}q)$  とすると  $(0 \leq p \leq 2, -2 \leq q \leq 0)$ ,

$$OP = 2p, \quad OQ = -2q$$

$OP + OQ = 6$  であるから  $2p + (-2q) = 6$  ゆえに  $q = p - 3$

したがって  $0 \leq p \leq 2$ ,  $-2 \leq p - 3 \leq 0$  すなわち  $1 \leq p \leq 2$   
 2点  $P(p, \sqrt{3}p)$ ,  $Q(p - 3, -\sqrt{3}(p - 3))$  を通る直線は

$$y - \sqrt{3}p = \frac{2p - 3}{\sqrt{3}}(x - p)$$

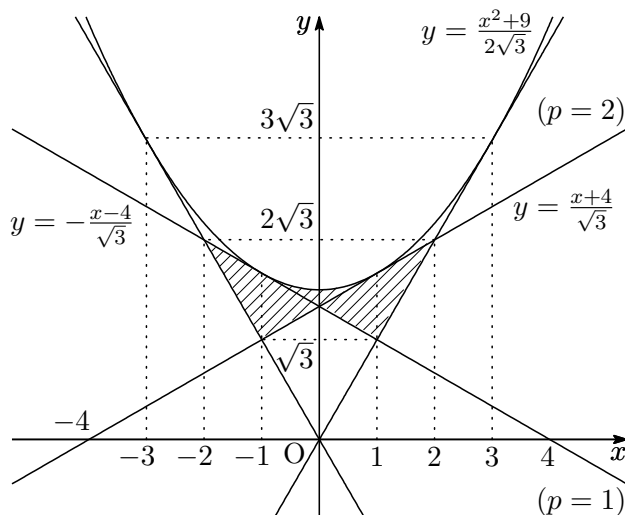
$$\text{すなわち} \quad y = \frac{(2p - 3)x - 2p^2 + 6p}{\sqrt{3}} \quad \dots \textcircled{1}$$

直線①の  $x$  を固定し,  $y$  が極値をとる点では,  $\frac{dy}{dp} = 0$  であるから

$$\frac{dy}{dp} = \frac{1}{\sqrt{3}}(2x - 4p + 6) = 0 \quad \text{ゆえに} \quad x = 2p - 3 \quad \dots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{ から } p \text{ を消去すると} \quad y = \frac{x^2 + 9}{2\sqrt{3}} \quad \dots (*)$$

$D$  は,  $1 \leq p \leq 2$  のとき, 2点  $P(p, \sqrt{3}p)$ ,  $Q(p - 3, -\sqrt{3}(p - 3))$  を結ぶ線分  $PQ$ (直線①) が通過する領域であるから, (\*) が直線  $PQ$  の包絡線であることに注意すると, その領域は, 下の図の斜線部分で, 境界線を含む.



よって,  $0 \leq s \leq 2$  をみたす点  $(s, t)$  が  $D$  にあるとき

$$0 \leq s \leq 1 \text{ のとき} \quad -\frac{s-4}{\sqrt{3}} \leq t \leq \frac{s^2+9}{2\sqrt{3}}$$

$$1 \leq s \leq 2 \text{ のとき} \quad \sqrt{3}s \leq t \leq \frac{s+4}{\sqrt{3}}$$

(2) 領域  $D$  は (1) で示した領域. ■